

# サマラの陶器 (1)

Die Keramik Von Samarra

Die Ausgrabungen Von Samarra Band II

Friedrich Sarre

フリードリヒ・サーレ

佐々木達夫, 大瀧 敏夫, 松崎亜砂子, 波頭 桂, 中本 寛 訳

## 序 言

エルンスト・ヘルツフェルトが1923年に刊行したサマラ発掘の最初の本『壁面装飾とその装飾法』の序文で、私はサマラ調査のいきさつと目的、発掘とその成果、および既に発表した論文について、概要を述べた。それらの論文のうち、陶磁器に関する部分については次のものが重要である。「サマラ出土の小遺物と9世紀のイスラム工芸に関する成果」『イスラーム』5巻2号と、フリードリヒ帝博物館のイスラム部門における発掘遺物の展示報告として1922年に刊行された『ベルリン博物館』5号である。陶器はとても壊れやすいが、破片になっても永く残るものである。陶片は、過去の文化をもっともよく伝えるものであり、残存する唯一の遺物になることもある。サマラの広大な遺跡の中のチグリス河東岸急斜面の二カ所では、赤褐色に彩色された彩文土器が、墓地の副葬品として出土した。こうした、サマラに古くから住んでいた人々の残した遺物については、数千年後のサマラとは無関係であるが、後に出版する予定である。この報告書で扱っているのは限られた年代の陶器、つまり、836年に始まり約50年だけ繁栄して、その後に放棄され、少しずつ廃墟となったカリフ時代の大きな建物・宮殿・個人の家の瓦礫の中から発掘されたものである。サマラ出土の陶器は、サマラまたはメソポタミアで生産された地元産の陶器のほかに、それとは技術的にも形のうえでも異なるさまざまな陶磁器、*スィツォイク*(*スィツォイク* 灰器)と磁器が含まれている。この陶磁器は、周知のような唐代の中国陶磁器と同じ種類であり、東アジアからの輸入品と見做していいだろう。発見状況からみて、それも絶対にサマラ期、すなわち9世紀のものである。サマラ期より後の時期に属しているのは、発見された陶器の中でほんのわずかなものであり、遺跡内でも限られた場所の窯跡で生産されたものである。その窯跡は、現在のサマラの聖廟とその周りの小さな村に近いところである。そこには粘土が豊富にあるので、永く生産が続き、恐らく輸出用の陶器を生産していたのであろう。これらの陶片には、焼き物を作った窯跡に常にある失敗品がみられ、材料や文様からサマラ期より後の時代のものと限定できる。この新しい時代の陶器については詳しくは説明しないが、この巻で扱う。この新しい陶器は、明らかに9世紀以降の東アジアからの輸入品の影響を反映しているため、注目に値するものである。

1913年夏に発掘が終了した際に、出土した陶磁器を含む小型の遺物は、注意深く箱詰めされ、トルコ政府のサマラ地方長官(Kaymakam)に委託され、城内に保管された。コンスタンチノブルの博物館にも、戦争前に少数の出土品が送られていた。戦争が始まったために、サマラで保管した出土品を、バグダッドの地方博物館に置くか、コンスタンチノブルの中央博物館に移すかを決定できなかった。そ

の後も、イラクで戦争が続いたため決定ができず、出土遺物は1917年春にイギリス軍に町が攻められた時も、そのままサマラの同じ場所に置かれていた。こうした状況下で遺物の一部、特に藁で梱包されていた漆喰の壁面装飾は砲火で破壊されたと言われる。しかし、小遺物の入った箱は、1917年ロンドンに送られた。大部分はブリティッシュ博物館に残っているが、少量の出土品は、ロンドンのビクトリア・アルバート博物館、パリのルーブル博物館、コペンハーゲンの工芸博物館、カイロのアラブ博物館、それにニューヨークのメトロポリタン博物館、ボストン美術館、ミシガン大学博物館、オハイオ州クリーブランド博物館などのアメリカの博物館に移管された。ブリティッシュ博物館に保管されていた出土品のうちから、ベルリンの博物館にも陶磁器が多く移管されたおかげで、陶磁器コレクションが豊かになった。これ以前に、コンスタンチノポリの博物館長ハ Ril・エドヘム・ベイ博士の厚意によって、注目に値するような種類の出土品がベルリンに送られていた。そのため今では、ベルリンのコレクションだけでサマラ陶器を完全に概観できるので、研究するうえでベルリン以外で保管されている陶片資料に頼ることはほとんどなかった。

ヨーロッパやアメリカの博物館に分割所蔵されている資料は、私が二度の発掘に参加し陶器研究に専念していた頃から周知のものであった。発掘中から始めた研究に、私はベルリンでも打ち込んでいた。一時中断があったが、戦争終了後にやっと再開することができた。非常に小さく割れた破片を接合し、元の形を復元する作業では、フリードリヒ帝博物館の修復担当者ザイル氏の腕に負うところが多かった。我々は復元したものに彩色はしなかったのが、復元部分がはっきりわかる。復元作業は、ヘルツフェルト教授が発掘中に残した調査日誌の中の観察・写真・スケッチ・水彩画などに、ひとかたならぬ恩恵を受けている。ヘルツフェルト教授によるもう一つの貢献は、陶器に書かれた文字を扱った付録Ⅰであり、文字の書かれた陶器は研究資料として非常に重要であり、この時代の銘文研究に果たす役割も大きい。付録Ⅱには資料分析の結果を含む。資料分析は二つの面から行われ、相互に補い合うものとなっている。ベルリン工科大学の資料分析研究所が、東アジアの陶器と、それに関連のあるサマラで作った陶器だけを資料としているのに対し、エッセンのハンス・アルノルト博士の研究はそれ以外のサマラ陶器のグループも扱っているのである。クレフェルトの陶芸家ポール・ドレスラー氏は、私の長年の友人で、その優れた作品は東洋のファイアンスに似せて作られる。彼は技術・粘土組成・釉薬に関して、様々なグループの陶片を詳しく研究した。筆者は、彼の名をそのつど挙げてはいないが、彼の説に依存するところが多い。

本書の目次を含め分類の基準となるのは、陶器の製作技法である。始めに無釉と施釉の陶器に二分類し、無釉土器(訳者注・次からは無釉陶器で統一してある)、メソポタミアの施釉陶器、輸入された施釉陶器、輸入品の模倣品という順番になる。

39の図版のうち、12はカラーで、約300の陶片もしくは復元した陶器・タイルなどを200以上の図に描き、記録する。本文中では400点以上の陶片を資料とする。そのつど、明示してあるように、いくつかの陶片はサマラ出土品ではなく、しかるべき所で入手したもの、または稀にはあるが古美術商で購入したものである。図の何点かは、他のコレクションのもので、比較のために載せた。サマラ出土の陶片のみに通し番号が付く。第一巻と一致させて(訳者注・この本は第二巻である)、通し番号の後にそのつど調査日誌の登録番号、計測値、ヘルツフェルトによるスケッチブックや水彩画、写真への参照指示を載せ、その後に短い概要をつける。陶器を種類ごとに分け、その名称を項目として挙げ、そのつど、概略を説明する。

カラー図版はドレスデンのオー・シュリヒト社で作られた。図版はほとんどヘルツフェルトのスケッチブックをもとにしており、それは図に付された計測値と彼のEHという文字で判別できる。残り

の図版は画家のボラハー氏、及び若干がマリー・ザイデル嬢と私の娘のマリー・ルイズにより準備された。

まずエルンスト・ヘルツフェルト氏、資料分析研究所のアルノルト博士、第一巻で用いられたものと謄写調整を行ったポール・ドレスラー氏とエルンスト・キューネル氏、その他サマラ陶器の研究において助力いただいた諸氏、本文で言及させていただいた諸氏に深く感謝の意を表する。さらに海外の諸博物館長、コンスタンチノブル博物館のハリル・エドヘム・ベイ氏、プリティッシュ博物館のP. L. ホブソン氏、ビクトリア・アルバート博物館のセシル・H・スミス氏、エリック・マクラガン氏に深甚の謝意を表したい。また、この第二巻の完成に際し、特別なご配慮を賜った出版社にお礼申し上げる。

ノイバベルスベルク、1925年4月      フリドリヒ・サーレ

(訳者注・サマラは日本語表記ではサーマッターが正しいかもしれないが、実際に聞こえる音サマラが簡単であるから、サマラに統一する。)

#### 略語表

Abb. Abbildung 図

Abkl. Abklatsch 模写

HO ヘルツフェルト著 "Der Wandschmuck der Bauten von Samarra und seine Ornamentik"

(『サマラ建築物の壁面装飾とその装飾法』)

IA Berlin ベルリン・フリードリヒ帝博物館のイスラーム部門の収蔵品

I-N サマラ出土品の登録番号(登録台帳)

PC ペザード著 "La Ceramique archaïque de l'Islam et ses Origines"

(『イスラーム古代陶器とその起源』パリ 1920)

RET サーレ、ヘルツフェルト著 "Aechäologische Reise im Euphrat-und Tigres-Gebiet"

(『チグリス・ユーフラテス流域の考古調査旅行』ベルリン 1920)

Skzb. スケッチブック(ヘルツフェルト教授のスケッチブック)

#### 無釉陶器

無釉陶器片がサマラ出土の陶器の大部分を占めている。無釉陶器は、施釉陶器が注目されているのとは対照的に、現在に至るまでほとんど顧みられていなかった。これは不当なことであり、それだけにイスラーム初期の無釉陶器については詳細な調査研究が必要である。例えばレリーフ装飾の場合、無釉ならば文字がとくに明瞭になるからである。

メソポタミアの高温の気候では、無釉陶器は多孔質なので液体を蒸発冷却し、比較的低温に保つため、好んで用いられていた。今でも、両手付きの大型壺や、木の台に載せる球状の容器が、中庭の日陰の場所に置かれ、家庭生活に必要な水で毎日満たされているのである。その水は毎朝近隣の川か運河から、皮袋に入れて家畜によって運ばれてくるものだ。このような無釉陶器の使い方はサマラ期でもおそらく同様で、10世紀初頭のバグダッドの高官の邸宅に関する報告にも示されている(注 A. Mez: "Die Renaissance des Islams" Heidelberg, 1922, p. 87. A. Mez: 『イスラームのルネッサンス』ハidelberg, 1922年, 87頁「邸宅内の広い喫茶室には、大甕が置かれ、歩兵や騎士、衛兵や役人など喉の乾いた者は誰でも、その甕から水を飲んだ。きめ細かいエジプト麻をまとった給仕が、白いタオルを肩にかけ、将校や役人や邸宅に勤めている人々に、ジュースをサービスした」)。また、これらの

大形の水甕には装飾が不可欠で、実際、非常に豊かな装飾が施されたものも一部にある。日常的に使う小形の水差や容器でも、装飾の無いことは稀である。それらはまさに形の美しさと機能性という点で傑出しており、陶工の芸術感覚は、把手の付け方や形に表れている。最もシンプルな日用品にさえ装飾を求めるのは、オリエント独特の特徴だからである。

土器の表面には、ロクロを回転させながら尖った棒や櫛で単純な、豊かな、また動きのある文様を付ける初歩的な施文技法と、ロクロを使わずにナイフで削る施文技法が多様に駆使されている。それらの施文技法の次に現れるのはスタンプ文やレリーフ装飾である。それらはロゼッタ文やメダイオンとして別々に付けられたり、組み合わせて用いられて帯状装飾となる。スタンプ文は装飾的文様や具象的な文様から成るもので、最後に手を加えた陶工の名前、つまり工場のマークの役目をするものとして使われることも稀にある。小さな容器を作る場合、型も用いられ、その型の小片がサマラより出土した(図版Ⅸ, 15)。型は容器の上部と下部を別々に作るのに用いられる。上下の各部分は接合され、次いで頸部や把手や底が付け足される。

独特のバルボティン(貼付)技術も用いられている。これは鋳型を使い容器の表面に装飾を付ける方法である。その技術はすでに古代オリエントで知られていたことが、アシュールやその他の発掘で証明された(注 W.Andrae: "Die archaischen Ishtar-Tempel in Assur" Leipzig 1922, S.36ff. W.アンドラエ:『アシュールにおける古代イシュタル寺院』ライプツィヒ, 1922年, 36頁以下。C.F.Lehmann-Haupt: "Materialien zur älteren Geschichte Armeniens und Mesopotamiens." Berlin 1907, S.111ff. C.F.レマン-ハウプト:『アルメニアとメソポタミアの古代史のための資料』ベルリン, 1907年, 111頁以下)。

この技術が、イスラーム時代の、特にチグリス・ユーフラテス川流域において存在したことは、我々が何度か論じてきた(注 "Jahrb.d. Kgl. Preuß. Kunstsammlungen" 1905, S.69. 『プロシア王立美術コレクション年報』1905年, 69頁。"Islamische Tongefäße aus Mesopotamien - Die Keramik im Euphrat-und Tigrisgebiet" Berlin, 1921, S.13ff. 『メソポタミア出土のイスラーム陶器 - ユーフラテス、チグリス流域における陶器』ベルリン, 1921年, 13頁以下)。特に前述した大型の水甕にもバルボティン技術は特徴的なものである。それは、小さな点やロゼッタ文、波状文の紐、隆起文、また、刻み目を付けて振じれた縄模様などで飾られるという、もっとも素朴な技術である。その後、動物や人間を描いた、より豊かな意匠が用いられた。ササン朝後期からイスラーム初期の間に、バルボティン技術はスタンプ装飾と組み合わせて、とくにサマラ近くのティクリットで、キリスト教徒の陶工が用いたようである。彼らは、十字架をスタンプに刻んだ。このような文様や、円形レリーフ内に形象文様のある陶片は、おそらくキリスト教徒に起源をもつものであるため、もともとサマラの街の中心であったカリフの総督代理邸跡ではほとんど発見されない。しかし、大運河沿いの東に位置するガナウアではこの種の陶器が非常によく見られる。キリスト教徒の入植した町だからであろうか。ガナウアにはティクリットの窯と関係のある窯があったのだろうか。いずれにしても、サマラの宮殿や個人家屋に、スタンプ文陶器とバルボティン技術の陶器が存在したことは、発掘品によって証明される。後に12-13世紀になってバルボティン技術はメソポタミアで絶頂期に達した。そして豊かな装飾と具象的な文様が施された大型の注目すべき容器を生み出した。その文様は、この時期の他の芸術的作品、例えばモスルのアタベク・ルールーの建造物の具象的文様(RET II. 238ff)、バグダッドの魔除け門の装飾(RET II. 151ff)、硬貨や象眼細工、いわゆるモスル青銅器(注 F.Sarre und M. van Berchem, "Das Metallebecken des Atabeks Lulu von Mossul" "Münchener Jahrb.d.Bild.Kunst" 1907. F.サーレ & M.ヴァンベルヒム:『モスルのアタベク・ルールーの金属容器』『ミュンヘン絵画美術年

報』1907年)のようなものと非常に密接な関係をもっているのである。

すでに述べたように、イスラーム初期の無釉陶器に関する文献は、サマラと比較対照するために用いることができるが、そのような文献は非常に限られている。ペザードにより模写され(注 Maurice Pézard: "La Céramique arshaïque de l'islam et ses Origines." Paris 1920. モーリス・ペザード: 『イスラーム古代陶器とその起源』パリ, 1920年)、3-6世紀のものとされた図版Xに示すスーサからの三つの陶片のうち、No.3はおそらくイスラーム期に属するものであろう。スーサから口縁部に唐草文とクーフィック文字が描かれた美しい小型の薄手の浅鉢(シャレ)(図版IX15)が出土したが、後で分かるように、サマラに多くの類似品がある。

サマラより少し後、11世紀のマグレブ無釉陶器に関しては、カーラ・ベニ・ハマから出土した遺物に言及せねばならない。この遺物は11世紀のマグレブよりも2世紀古いメソポタミアの陶器と多くの類似性を示している(注 G. Marcais: "Les poteries et faïences de la Qal'a des Beni Hammâd" Constantine, 1913, pl. VII-X. G. マルセイ: 『カーラ・ベニ・ハマの陶器とファイアンス』コンスタンティン, 1913年, 図版VII-X. Général de Beylié: "La Kalaa des Beni-Hammad", Paris, 1909, pl. XV-XX. 『カーラ・ベニ・ハマ』パリ, 1909年, 図版XV-XX)。また、トレムセンで発見された窯の製品はマグレブより1世紀遅れるもので(注 A. Bel: "Un atelier de poteries et faïences au XI<sup>e</sup> siècle, découvert à Tlemcen" Constantine, 1914. A. ベル: 『トレムセンで発見された10世紀の陶器とファイアンスの窯』コンスタンティン, 1914年)、オールド・コルドバ出土の遺物(注 R. Velázquez Bosco "Medina Azzahra y Almiriya" Madrid, 1912. R. ベラスケス・ボスコ: 『メディーナ・アツツァーラとアラミリア』マドリッド, 1912年)と同様、比較対照することができる。エジプトのフスタート出土の無釉陶器については未刊行なため、我々にはわからない。最近出版された図版にも、フスタートで発見された無釉陶器はない(注 "La Céramique égyptienne del'Epoque musulmane" Basel, 1922. 『イスラーム期のエジプト陶器』バーゼル, 1922年)。

## 1. 無装飾、あるいは僅かな装飾の無釉陶器

### A. ロクロ製小型把手付水差

黄白色の薄い胎土。すっきりした形。装飾は簡単な刻線か劃花文に限られている。把手の上には平たい小突起や球状の小突起がある。水差は家庭で使われ、バスルームの中でしばしば発見された。この種の陶器が比較的多く出土する所は、クライナーの家屋とパルティアの墓地の二箇所であった。

1. I-N. 72; 図1; 写真90; 口までの高さ 21.5 cm, 胴の周囲 53.2 cm。円筒状の胴部及び頸部をもつ把手付水差。把手には小突起がある。出土地点、クライナー、家屋IV。

I-N. 73; 写真90。類似の陶片。パリ、ルーブル美術館。

2. I-N. 300; 図2; スケッチブック<2>42頁; 高さ 10 cm, 底径 7 cm。類似の把手付水差。出土地点、パルティアの墓。

3. I-N. 133; 図版II 3; 写真98; スケッチブック<2>12頁; 高さ 18.2 cm, 胴の周囲 37.3 cm。類似の把手付水差で、胴部に刻線のあるもの。出土地点、家屋Vのバスルーム。

4. I-N. 132; 図3; 写真98; スケッチブック<2>19頁。類似の把手付水差。ロンドン、ブリティッシュ博物館。出土地点、同上。

I-N. 298; スケッチブック<2>42頁。出土地点、パルティアの墓。

5. I-N. 299; 図4; スケッチブック<2>42頁。出土地点、同上。類似の把手付水差であるが、刻線の装飾無し。

- I-N.75;スケッチブック<1>28頁;写真90。出土地点、クライナー、家屋Ⅳ。
- 6.I-N.174;図5;スケッチブック<2>19頁。ロンドン、ブリティッシュ博物館。出土地点、家屋Ⅵの北東の部屋。
- I-N.134;スケッチブック<2>19頁。出土地点、家屋Ⅶのバスルーム。
- I-N.135;ロンドン、ビクトリア・アルバート博物館 C.730-1922。出土地点、同上。
- 7.I-N.78;図6;スケッチブック<1>28頁;高さ 22.2 cm, 胴の周囲 51 cm (訳者注・原文では径とあるが、図から判断して胴の周囲の長さとする)。球形胴部と円筒形頸部をもった、把手付水差。ロンドン、ブリティッシュ博物館。出土地点、発掘 クライナー、家屋Ⅱ。
- I-N.76,77;写真90,305;スケッチブック<2>26頁。出土地点、家屋Ⅶのバスルーム。
- I-N.156;スケッチブック<2>20頁。出土地点、同上。
- 8.I-N.295;図7;写真308,184;スケッチブック<2>41頁。類似の形状の把手付水差で、頸部に刻線装飾が見られる。出土地点、パルティアの墓。
- I-N.74;写真90,305;スケッチブック<1>28頁。出土地点、クライナー、家屋Ⅱ。
- I-N.296,297;スケッチブック<2>41頁。出土地点、パルティアの墓。

#### B. 大型の厚手の壺、水甕

硬く焼かれた黄白色胎土より作られている。球形胴部と円筒形頸部を持ち、刻線文様帯や粗い劃花文装飾が施されている。

- 9.I-N.1006;図版Ⅱ1;Herzfeld 1923 図版XI;高さ 89 cm。硬質で黄白色の胎土の水甕で、卵形の胴部に短い円筒形頸部をもち、四つの把手には簡単に動物を形作った突起がある。肩上部には、ひだ状の帯と簡素な刻線装飾が施されている。サマラで購入したもの。
- I-N.509;写真310,434;スケッチブック<3>44頁;高さ 18.2 cm。類似の形状の小型の壺の頸部破片。同様に簡素な刻線装飾をもつ。出土地点、スー・イーサと川の間にある、ライオンの描かれた帯状彩色壁画を持つ家屋。
- 10.I.1007;図版Ⅰ1;9×13.5 cm (訳者注・原文では 0.9 cmとあるが、写真の大きさから 9 cmと判断する、以下の訳注も同様)。類似の壺の頸部の破片。ひだ状隆起のある口縁と、刻線による数本の圈線と波状文 (訳者注・組み合わせるとドイツ語では網目文という) がある。出土地点、スー・イーサ付近。
- I-N.1007-1011類似の形状と装飾をもつ壺の破片。
- ロンドン、ビクトリア・アルバート博物館(C.661-1922)にも、厚手で赤味がかった素地の壺で、縞の帯状装飾と幅の狭いジグザグ模様をもつ破片がある。

#### C. 様々な形状の容器

- 11.I-N.172;図8;写真98,306;スケッチブック<2>18頁;高さ 33 cm, 胴の周囲 90.9 cm。膨みのある胴部と短い頸部をもった容器で、中央部に三つの透かし窓をもつ。肩部には刻線による帯状の網目文が施されている。燃えている木炭を入れる暖炉として利用したものか。出土地点、家屋Ⅵ、北東の部屋。
- 12.I-N.173;図9;写真98,306;スケッチブック<2>18頁;高さ 31.5 cm。卵形の胴部をもつ。出土地点、同上。
- 13.I-N.375;図10;写真215,317;スケッチブック<3>14頁;高さ 35 cm。何らかの容器の、釣鐘形の

蓋。柄と二列のくさび形の透かし窓を持つ。

14. I-N.158; 図11; スケッチブック<2>18頁; 高さ 13.5 cm。花鉢形の簡素な容器。出土地点、家屋 V。

I-N.374; 写真342b; スケッチブック<3>14頁; 高さ 16 cm。類似の破片。出土地点、パルティアの墓。

## II. 押印意匠のある無釉陶器

### A. 装飾的意匠あるいは文字を伴う円形押印

大型で厚手の容器、硬く焼かれた黄白色・白色の胎土。

15. I-N.506; 図版 II 2; 写真319b, 436a; スケッチブック<2>43頁; 高さ 26.5 cm。輪高台をもった把手付水差。球形胴部の肩の部分に、四分の三の輪(半月?)と鋸歯状花形の押印が二列に施される。出土地点、アシークの川沿い。

16. I-N.1017; 図版 I 4; 0.3×0.7 cm (訳者注・一桁違いだろう)。薄手容器の破片で、放射状の円形押印をもち、その他にも判別できないが、何らかの意匠を伴う。出土地点、大モスク。

17. I-N.985; 図13; スケッチブック<8>21頁。円形押印をもつ厚手の容器の破片。十字架の棒と棒の間に玉を配置し、その回りに玉状文が巡る円形押印。出土地点、ガナウア。ロンドン、ビクトリア・アルバート博物館 C.628-1922。

18. I-N.985; 図14; スケッチブック<7>33頁。同様の円形押印のある破片。三日月と三角形とを十字架の各先端に配した円形押印がある。出土地点、同上。

19. I-N.985; 図15; スケッチブック<7>31頁。同様の破片で、円形押印の中に網目帯状ロゼッタ文の装飾をもつ。出土地点、同上。

I-N.1015; I-N.534; 写真321; 模写。装飾的な円形押印のある破片。

20. I-N.849; 図16; 写真348; 模写; 8.5×10 cm。円形押印の中に、横方向に玉と線を並べて連ね、中央に陶工銘を入れた破片。陶工銘、ウマル作。付録 I 1 参照。

21. I-N.590; 図17。二重の連珠文に縁どられ、陶工銘が内側にある円形押印の一部分の破片。陶工銘、ウマル作。付録 I 2 参照。

22. I-N.214; 図18; 写真146, 322a; 模写。二重縁の円形押印のある破片。陶工銘、ウバイド作。付録 I 3 参照。

23. I-N.1019; 図版 I 3; 図19; 0.95×0.75 cm (訳者注・一桁違いだろう)。同様の円形押印をもつ破片。陶工銘、ジクリー作。付録 I 4 参照。

24. I-N.1018; 図版 I 5; 図20; 0.11×0.10 cm (訳者注・一桁違いだろう)。同様の円形押印をもつ破片。陶工銘、イーサ作。付録 I 5 参照。

25. I-N.236; 図21; 1.3×1.2 cm。同様の円形押印をもつもので、横方向の連珠文の間に三つのギリシャ文字がある。付録 I 6 参照。

### B. 具象的なデザインの円形または四角形の押印

淡い黄白色の胎土で、硬く焼かれた大型の厚手の陶器に押されている。陶片は旧サマラの町中からは出土しないが、周辺部に散在している遺跡、特に町の東の大きな運河に面したガナウアから発見される。

動物の図は、牡羊、野生ヤギ(アバクス)、シカ、アンテロープ、牡野牛、小羊、ガン、またはクジャ

クの尾を持ったササン朝のグリフィンなど、チグリス地域の古い美術様式に属するものであり、すでにスーサとサマラの先史時代の土器に見られたものもある（注 'Die Kleinfunde von Samarra' "Der Islam V" 1914, p.180ff. Abb.2,3. Fig.4.「サマラの小遺物」『イスラームV』1914年,180頁以下, 図版2,3. 図4)。これらの動物は古代オリエントやササン朝の円筒形印章によく描写されているモチーフである。このような古いものやもう少し後の時期の動物の図像や、サマラ陶器の押印には、ササン朝のゾロアスター教と、キリスト教のモチーフが取り込まれており、それらはシンボリックな意味を持っている。同様の図像が同時期の織物のデザインや、ベルリン博物館のイスラーム部門にある有名な漆喰のメダイヨンや（注 "Jahrb.der Kgl Preuß.Kunstammlungen" 1908.『プロシア王立美術コレクション年報』F.Sarre:"Makam Ali" Abb.7. F.サレ:『マカム・アーリ』図7)、またガラス押印（注 Rob.Schmidt:"Das Glas" Berlin,1912, Abb.20. ロフ・シュミット:『ガラス』ベルリン1912年, 図版20) などに使われていることは、ヘルツフェルトにより指摘されている。

具象的な押印のある陶器で、唯一、器形がよく残っているものが、ブリティッシュ博物館のバビロニアの展示室に展示されている(N.92394)。それは明灰色粘土で造られ、白色化粧掛けされた把手付水差である(図22)。球形胴部の下部には、雷文帯で区画された二段の幅の広い文様帯がある。その文様帯を構成するのは、草を食む鹿とその背後の三日月である。この陶器はもちろんサマラ出土のものではない。

26.I-N.985; 図版Ⅲ1; 図23; スケッチブック<7>1-33頁; 模写; 高さ 4.5×9 cm。大型の厚手の容器の破片。騎兵が描写された連続円形押印をもつ。ベルリンにある同様の12点の破片はすべてが同一容器のものではない。他に一点(図版24)がロンドンのビクトリア・アルバート博物館にあるC.627-1922。

27.I-N.985; 図版Ⅲ2; スケッチブック<7>34頁; 同<8>20頁; 4.5×5 cm。大型厚手容器の破片。左向きの鹿を伴った円形押印。ベルリンにある三点の破片のうち、二点は同一個体の破片。

28-30.I-N.985; 図25-27; スケッチブック<8>20-22頁。大型厚手容器の破片。

31-32.I-N.985; 図28,29; スケッチブック<8>20-22頁。同上。31(図.28)、32(図.29)ロンドン、ビクトリア・アルバート博物館 C.626-1922。

33.I-N.985; 図版Ⅲ3; 4×4.7 cm。同上。右向きの鹿を伴う円形押印。

34.I-N.985; 図版Ⅲ6; 5×6.5 cm。同上。

35.I-N.985; 図30; スケッチブック<8>20頁。右向きの野性ヤギ(アバックス)を伴う円形押印(?)。ロンドン、ビクトリア・アルバート博物館 C.625-1922。

36.I-N.985; 図版Ⅲ4; 7.5×10.5 cm。授乳させているガゼルと、赤ん坊のガゼルの連続押印。

37.I-N.985; 図31; スケッチブック<7>31頁。同じ意匠の押印だが、右向きのもの。

38.I-N.985; 図版Ⅲ5; 7.5×6.5 cm。押印による二重の帯状装飾。上部の装飾帯は四肢動物、下部は十字架を伴った鳥(野雁?)から成る。

39.I-N.985; 図32; スケッチブック<7>22頁。38と同じ容器の破片で、下の方に帯状装飾の押印がある。

40.I-N.985; 図33; スケッチブック<8>23頁。動物の不鮮明な形が見られる円形押印。

### C. 連続文、または帯状装飾

厚手の、ほとんどが白い厚塗の漆喰で覆われた、無釉の大型陶器上に施されたものである。この装飾様式はサマラの宮殿と個人家屋の漆喰装飾に見られるものと、部分的に似ている。出土地点、ほと



んどが個人家屋。

41. I-N.525A; 図34; 写真321; 模写; 19×13 cm。星型の押印を伴う破片で、星型の連続した形状が網目模様を呈しているもの。
42. I-N.525b; 図35; 写真321; 模写; 12×9 cm。パルメット文形状の、つぼみの形をした押印を伴う破片。H O 図19, 20参照。
43. I-N.525c; 図36; 写真321; 模写; 10×8.5 cm。パルメット文形状の、つぼみの形をした押印と、斑点を伴う破片。
44. I-N.527a, b; 図37; 写真319a; a: 10×13.5 cm, b: 9×12 cm。二列の文様帯のある破片。上部の文様帯は同心円であり、下部は建築学的意匠でアーケードのような半円を上方に伴う円柱（格子）形状を描いている。
45. I-N.526a; 図38; 写真317; 模写; 8.5×4.5 cm。パルメット文様帯のある破片。
46. I-N.526b; 図39; 写真317; 模写; 10×5 cm。装飾的なクーフィック文字を伴った破片。
47. I-N.1020; 図版IV5; 7×9 cm。大型の容器の頸部破片で、文様帯は尖頭アーチの連続文の区画からなり、区画内は種々の浅い彫りの文様で埋められている。その上と下には、網目文様帯が施されている。
- I-N.933; 幅4インチ。類似の破片で、二つの水平な文様帯を伴っており、それは連続した馬蹄形と横線でできている。ロンドン、ビクトリア・アルバート博物館 C.647-1922。

#### D. 型押し文様を伴う小型の容器

これは特に薄手の容器で、型造りの三つの部分からなるものが多く、そのいずれの部分にも型皿で文様が施されている。町の中から発見されるが、とくにアシークに多い。ナスリヤで発見されたナスヒー体文字のあるいくつかの陶片は、おそらく新しい時期、11-12世紀のものだろう。ナスリヤではサマラが廃れた後まで、窯が生産を続けていたらしいからである。

- 48-51. I-N.531a-d; 図40-43; 写真316-18。この種の胴が膨らみを帯びた容器の破片四片で、それぞれ異なった文様を持つ。幾何装飾の部分や、植物的特徴を持つ文様の部分があり、様々な幅の文様帯から構成される。これはサマラの区割り装飾によく見られるものである。Herzfeld 1923 図49, 50, 183等参照。出土地点、アシークおよび家屋VI、西の部屋。ロンドン、ビクトリア・アルバート博物館 C.713b, 714-1922。ロンドン、ブリティッシュ博物館。
52. I-N.418; 図44; 写真320; 模写。八枚花卉のロゼッタ文の周囲にナスヒー体の文字帯がめぐる破片。出土地点、ナスリヤ。約11-12世紀の新しい時期のもの。ロンドン、ブリティッシュ博物館。
- I-N.417; スケッチブック<4>15頁; 写真318; 模写。球形胴部と直立した頸部をもつ水差の破片。胴部には魚鱗連続文、基部と肩部には小さな帯状装飾が施される。出土地点、アシーク。ロンドン、ブリティッシュ博物館とビクトリア・アルバート博物館 C.722-192。
53. I-N.1021; 図版I 10; 8×8 cm。球状胴部に継ぎ足された底部の破片。平底底部外面に星形ロゼッタ文が押印されている。出土地点、アシーク。
- I-N.24; スケッチブック<1>18頁。大型壺の破片。底部外面に装飾が押印されている（ソロモンの印章）。出土地点、大モスク。
54. I-N.807; 図版IV 10; 6×4 cm。小型ランプの楕円形の上部片で、簡単な縁飾り装飾が押印されている。出土地点、ジュサーク。

### E. 薄手の円錐形杯

部分的に卵の殻のように薄く、豊かな装飾的文様をもち、具象的文様もみられる。

55. I-N.1022; 図版IV7, 11; 本文図版1; 高さ 10 cm。卵殻のように薄い円錐形杯（聖体容器）の9片の破片で、うまく焼かれており、灰色の陶土から丁寧に成形されている。素地の上に、押してできた髷がよく見える。外壁面には、四角に区切られた区画の中に、装飾円形紋章の押印が施されている。わずかに上げ底になっている底部の内側にはロゼッタ文が施されている。ロゼッタ文にはハート形と葉の意匠が仕切り帯の中に施されている。蓋無し。

55a. I-N.593; 図45; スケッチブック<6>31頁; 5×2.5 cm。類似の杯の破片で、細かく描かれた網目模様を伴う。出土地点、ジュサーク。

I-N.1023-1026. この種の杯の蓋と平底と胴部の破片。細かい押印意匠で装飾されている。

56. I-N.1027; 図版IX9; 4×3 cm, 厚さ 0.7 cm（訳者注・原文では直径となっているが、図から判断して厚さとする）。直線的な胴部をもつ低いカップの破片で、赤く焼成された陶土から成り、外部は灰色を呈している。刻線が施された素地の上に図柄（動物？）が押印されているが、その図柄の模様は不明瞭である。

### III. 劃花文・刻線文装飾の無釉陶器

57. I-N.232; 図46; 写真322b; 模写; 16×8 cm。豊かな劃花文装飾を持つ大型無釉陶器の肩部から頸部の破片。帯文と網目文装飾を持つ。出土地点、家屋Ⅱ。ロンドン、ブリティッシュ博物館。

58. I-N.530a; 図47; 写真322; 模写; 11×8 cm。劃花文による波線装飾をもつ薄手の容器の、直線的な頸部から口縁部の破片。ロンドン、ブリティッシュ博物館。

59. I-N.530b; 図版IV9; 写真317; 4×5 cm。薄手容器の直線的頸部から口縁部の破片で、劃花文による菱形文と貼り付け玉飾りを伴う。

I-N.524; 模写。大型の厚手の容器の破片で、深い刻線をつけたガラスの様式にならって、簡素な意匠（菱形または鋸歯状）が、刻線と斑点で描かれている。出土地点、アシーク付近の川。

### IV. 劃花文技術と関連したバルボティン（貼付）技術の装飾をもつ無釉陶器

I-N.522; 模写。大型容器の資料で、簡素な主文様（螺旋状渦巻文）がつけられ、深い彫刻による鋸歯状および簡素な帯文が結びついている。出土地点、個人家屋。

60. I-N.533; 図48; 模写; 23.5×20 cm。一つの大型水甕の破片で、腕を胸の前で組んだ(?) 粗略な女性像を伴う。刻み目の入った帯が、二本交差して、女性像の上半身部を囲んでいる。帯の交点から、蛇に似た波状の帯が下方に走る。下地には劃花文が施されている。しばしば見られる古式な主文様である。RET図版CXIV(IAベルリン3734)参照。ロンドン、ブリティッシュ博物館。同種の別の破片がロンドンのブリティッシュ博物館に収蔵されている。

I-N.1033, 1034。類似の容器の破片2点。出土地点、アブ・イーサ。

I-N.93; 写真312, 97。1点の大型水甕からの約30の破片で、紐穴と輪の付いた頸部と4つの把手をもつ。肩部には具象的な带状装飾があり、様々な情景・描写がみられる。すなわち、シカを襲うライオンや、スフィンクス、ドラゴン、女性像などである。単純な線で描かれた素朴な様式である。ロンドン、ブリティッシュ博物館。出土地点、家屋Ⅱ。

61. I-N.521a; 写真304; 模写; 19×15 cm。大型容器の破片で、上部に長髪の女性像がみられる。带状装飾およびロゼッタ文を伴う。

I-N.521b,c;写真313,314。動物像を伴う、同じ個体の他の2点の破片。

I-N.522,523,1034;写真313/14。モスルでよく発見されるような、上質のバルボティン陶器の破片であり、モスル発見品よりも新しい時期のものと思われる。主文様は蔓巻文と動物像である。

RETIV図394,395参照。

62.I-N.1034;図版I 2; 8.5×8 cm。押圧による縁飾りと、部分的に剝離しているが、植物の蔓巻文およびロゼッタ文の主文様を伴う破片。類似の主文様は杯 55.I-N.1022にも認められる。出土地点、アブ・イーサ。

63.I-N.429;図50; 6×6.5 cm。水甕の注口部で、牛頭の形状をしている。粗製で、劃花文・刻線文を伴う。角の部分は破損している。出土地点、アシーク。

63a.I-N.376;図51;スケッチブック<3>15頁;写真315b。類似の動物頭部で注口となっており、様々な形が張り付けられている。出土地点、パルティアの墓。ロンドン、ブリティッシュ博物館。

64.I-N.160;図52;スケッチブック<1>42頁;高さ 8.8 cm, 長さ 10 cm。粗略に形作られた牛(子供の玩具)で、劃花文による描線を伴う。出土地点、家屋V IIa。

65.I-N.168;図53;スケッチブック<1>42頁。粗略に形作られた馬で、鞍とくつばみがつけられている。頭部および脚部は欠損している。出土地点、同上。

## V. 無釉陶器の頸部と把手

### A. 簡素な粗製陶器の頸部と把手

部分的にバルボティン(貼付)技法により装飾されている。帯状の把手に尖った飾り突起をつけたもの(I-N 530a)、平たい飾り突起のもの(530b)、中央に溝が刻まれた幅広い、把手としての二本の帯のついたもの(530c)、頸部と把手の間に帯の結び目の付いたもの、隆起のあるもの(530d,533)。これらはすべてロンドン、ブリティッシュ博物館に収蔵されている。写真316/17。

### B. 上質な陶器の把手

<a.> 上に飾り突起をもつ丸い把手で、飾り突起の部分は球状、尖頭状、花状、バラ形、動物などの形状である。出土地点、個人家屋およびアシーク。

66.I-N.806;図54。弧状の把手で貼り付けによる花文状飾り突起を伴う。

67.I-N.430;図55;スケッチブック<3>28頁;高さ 4.5 cm。粗雑な雄鶏形状の飾り突起部分。

<b.> 把手の飾り突起の代わりとして、把手が口縁部に接する部分に、パルメット文や動物頭部の形に作られたつまみ。

68.I-N.1038;図版IV 3;スケッチブック<8>18/19頁。口縁部に豊かなパルメット文を伴う二本の棒を合わせた把手。

69.I-N.430;図版IV 1;図56。長い耳をもつ動物(キツネ?)の頭部を伴う把手。ロンドン、ブリティッシュ博物館。

70.I-N.1039;図版IV 2。丸みを帯びた把手で、貼付パルメット文が施されているもの。

71-75.I-N.762,787;図57-61。丸みを帯びている、異なる4点の把手で、貼付パルメット文が施されているもの。

### C. 押圧文の意匠を伴う幅広帯状の把手

76.I-N.807;図版IV 6;スケッチブック<6>31頁; 7×2.5 cm。幅広の帯状把手の下部。押圧文の意匠

にクーフィック文字およびサマラ様式の付け根装飾が施されている。出土地点、宮殿。

77.I-N.1029;図版IV8; 6.3×4 cm。幅広の帯状把手の下部。装飾的意匠がつけられている、網目の帯状装飾が八角星を形作っている。

78.I-N.1030;図版IV4; 5×2.3 cm。幅広の帯状把手の下部。簡素な網目の帯状装飾を伴っている。

#### D. パルメット文を伴う把手の接合部分

大型の容器の肩部分のものである。出土地点、ジュサークおよび家屋V。

79.I-N.509;図版XXXV5;図62;スケッチブック<2>28頁;写真317。容器の肩部の破片で、二重の棒状の把手およびパルメット文を伴う。出土地点、個人家屋。

80.I-N.1031;図版I7;図63; 8.2×7.5 cm。容器の肩部の破片で、パルメット文を伴う。

81.I-N.1032;図版I6;図64; 7.5×5.5 cm。同上。

I-N.762。類似の破片。スケッチブック<6>46頁; 同<2>28頁。ロンドン、ブリティッシュ博物館。

### VI. 赤色素地の無釉陶器

#### A. 大型で半球形の容器

82.I-N.419;図65;高さ約 21 cm, 径 23 cm。一個体からの8破片で、外反した口縁と、肩部に二つの平たい把手があり、それと並んで刻線文による帯文が施されている。出土地点、アシーク。これとよく似た容器の2片が1908年にアシークで発見されている。他にも2片がパリ、ルーブル博物館に収蔵されている。

#### B. 小型の薄手の容器

特に半球形の浅鉢(Schale)で、押圧文かバルボティンによる装飾が施されており、灰色素地の薄手の容器を思わせる(本文II E)。数片の素地には、金色に輝く雲母が混じる。

83.I-N.734;図版IX1;図66;高さ 3 cm。浅鉢の破片。外部には古式陶器に似た帯状装飾が施され、それはアーチ文で結ばれた糸杉文を伴うものである。出土地点、ジュサーク。

84.I-N.734;図版IX4;高さ 3 cm。類似の陶器の破片、より豊かな装飾が施された容器の小破片。

85.I-N.734;図版IX2; 5×4 cm。類似の陶器の破片。星文がはめ込まれた魚鱗文の意匠が施されている。

86.I-N.1043a,b;図版IX3; a:2.5×3.5 cm, b:2.5×2.5 cm。同上。同心円状の意匠を伴う帯状装飾。

87.I-N.566;図版IX6;写真45; 4.5×3.5 cm。容器の平底の破片。クーフィック文字が浮き上がる。

### VII. 薄手の無釉陶器

黄味がかった陶土で作られ、赤色の酸化鉄が塗られ、古式のテラシギラータ(赤色磨研土器)と似ている薄手の無釉陶器。

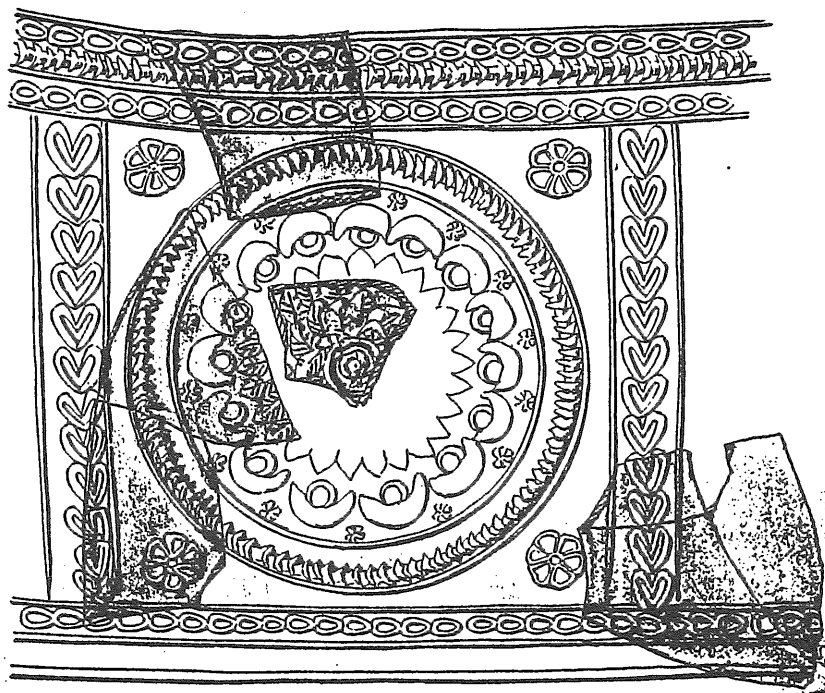
88.I-N.734;図版IX5; 3.3×5 cm。薄手陶器の直線的な頸部から口縁部の破片。赤みがかった黄色の陶土に光沢のある赤色顔料がかけられ、内外面とも磨かれている。劃花文による文字がみられる。付録I 27参照。出土地点、ジュサーク。

I-N.724, 1048, 1049。装飾や文字が施されていない4点の小さな類似の破片。

## 補足

89.I-N.1028a,b;図版IX13,15; 5×4.8 cm。(型押文の) 陶器を作るために用いられたであろう型鉢の口縁部の破片と、その型に(粘土が)注ぎ込まれて作られた陶器。文様は飛鳥(フェニクス?)で、翼と尾の羽根が見え、背景にパンチ文様が刻印されている。

図67a,b (IAベルリン2308)参照。型鉢およびその型で作られた陶器。少し新しい時期、12-13世紀のものである。型鉢は丸みを帯びた容器の本体を作るのに用いられた。型鉢の内部で無地のままの部分は、頸部につながる把手が後から付け加えられる箇所である。これは、カイロの古美術商から入手したものである。

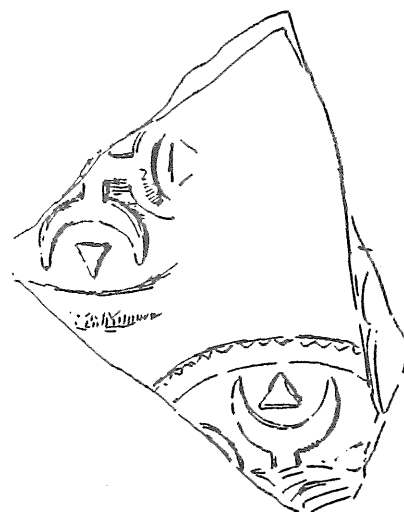


本文図版 1 薄手円形杯の型文裝飾復元図 (Text Tafel A2)

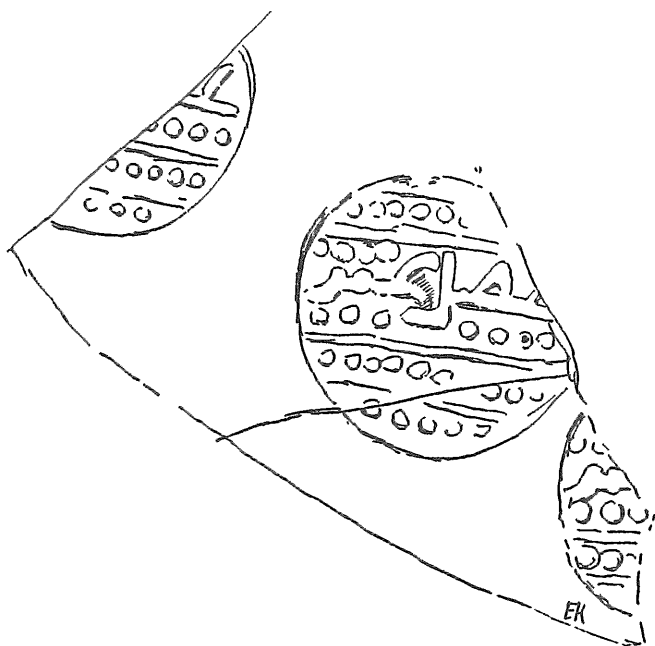




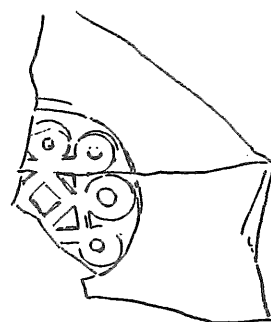
17 図13



18 図14



20 図16



19 図15



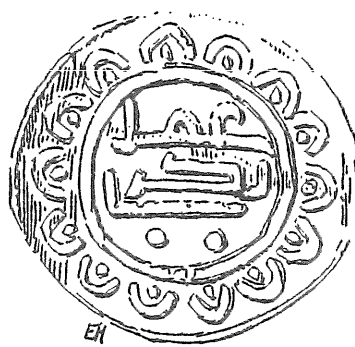
25 図21



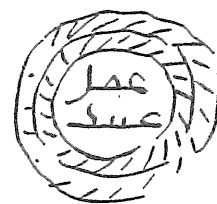
24 図20



21 図17



23 図19



22 図18

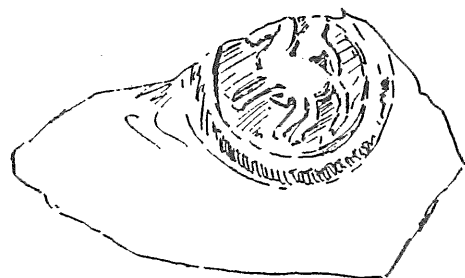
Figure 2 円形押印装飾、押印文字のある無釉陶器



BM London 図22



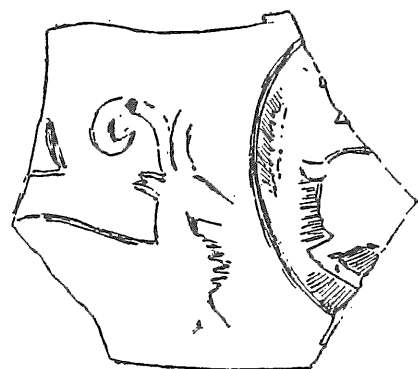
26 図23



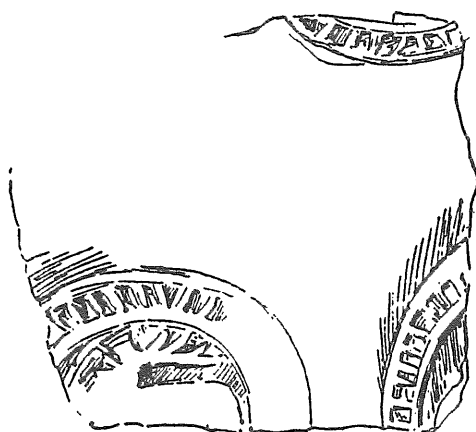
26 図24



28 図25



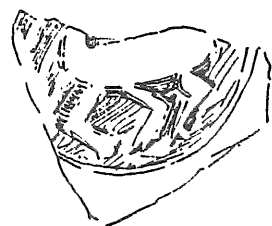
35 図30



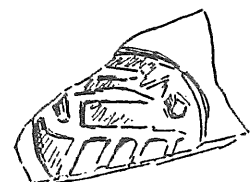
30 図27



31 図28



29 図26



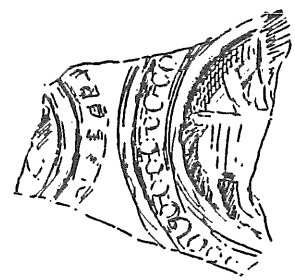
32 図29



37 図31



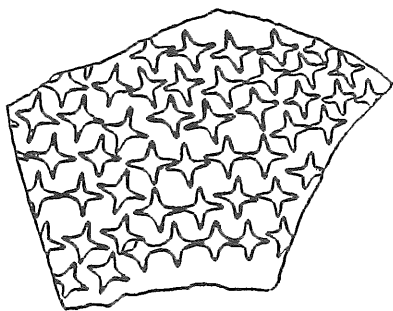
39 図32



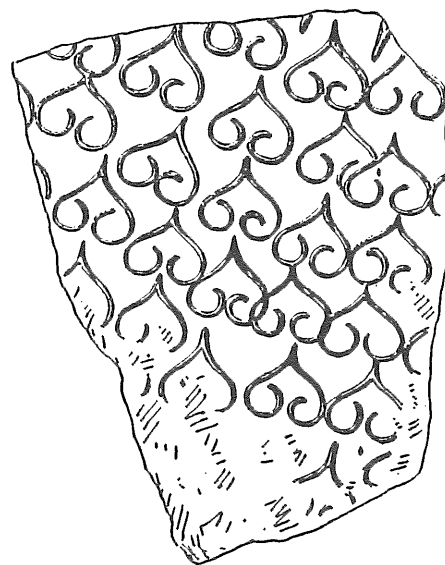
40 図33

Figure 3 具象的押印意匠のある無釉陶器

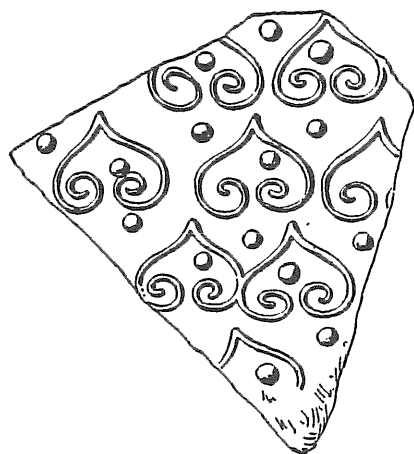




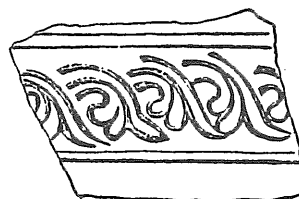
41 図34



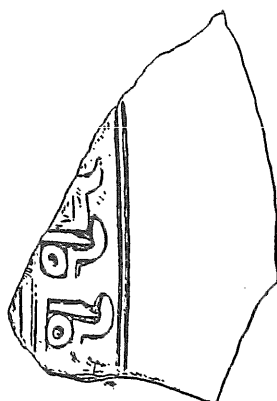
42 図35



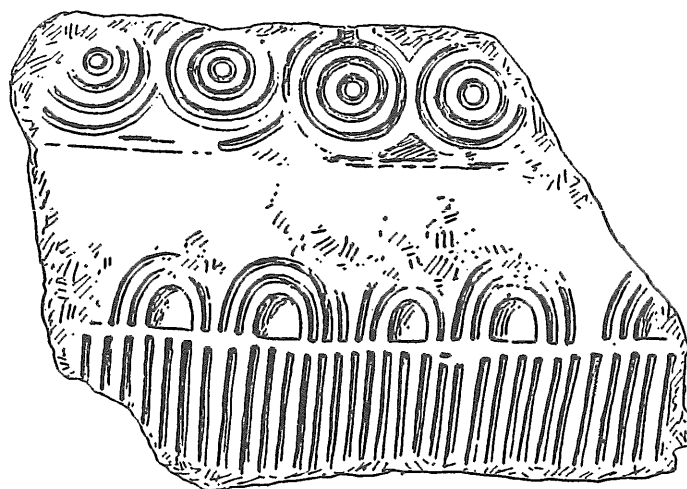
43 図36



45 図38

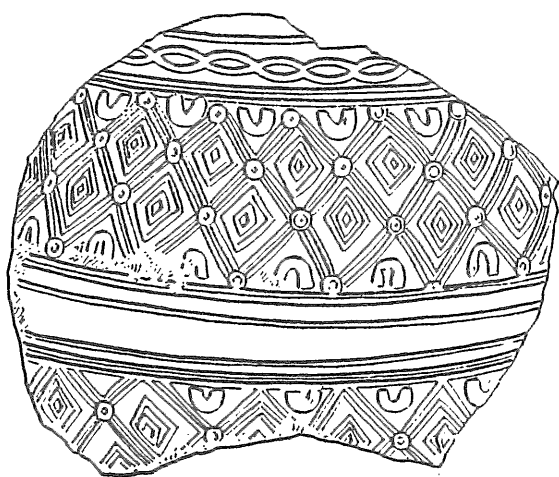


46 図39

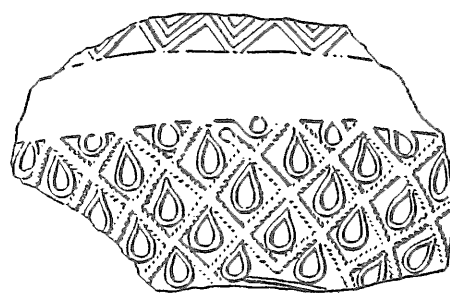


44 図37

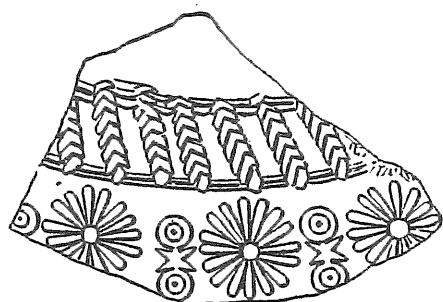
Figure 4 連続押印装飾のある無釉陶器



48 図40



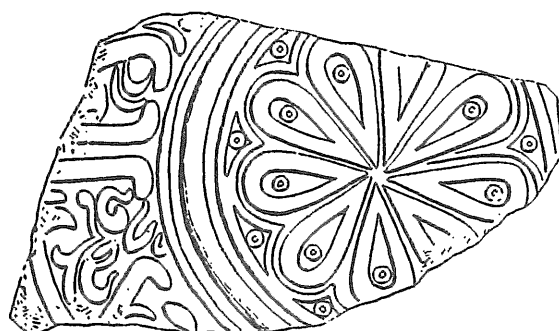
49 図41



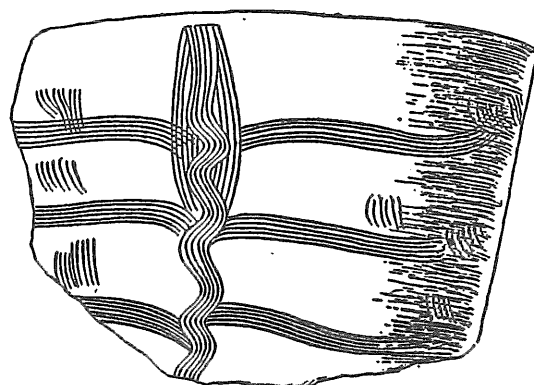
50 図42



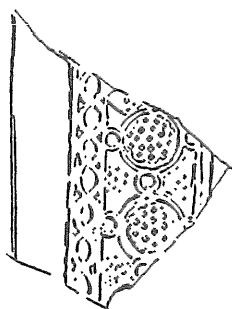
51 図43



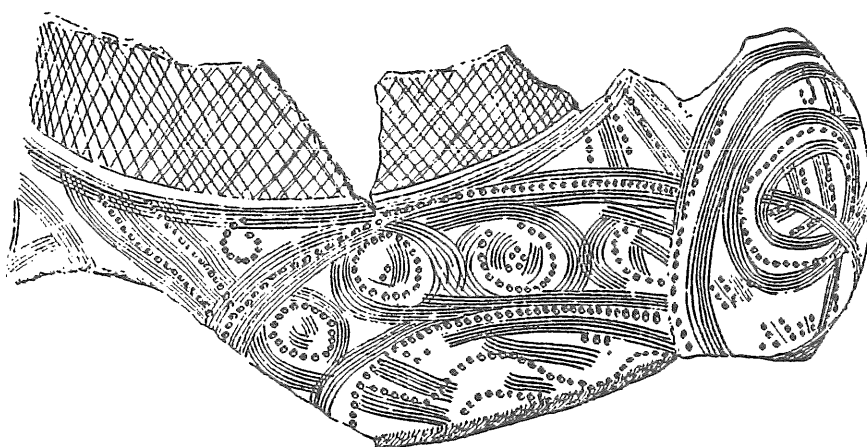
52 図44



58 図47



55a 図45

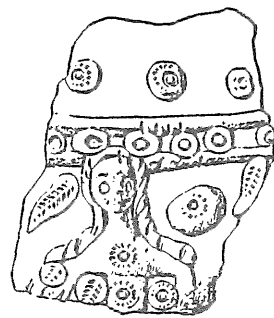


57 図46

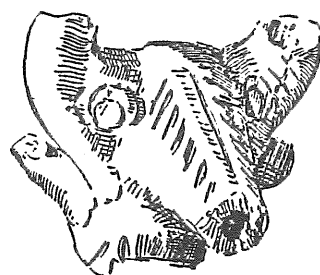
Figure 5 型文、劃花文、刻線文裝飾のある無釉陶器



60 図48



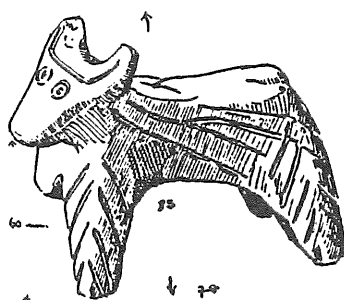
61 図49



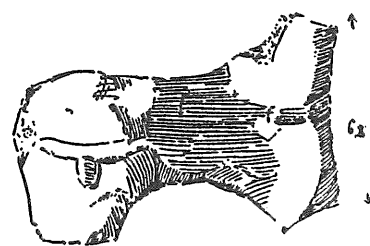
63 図50



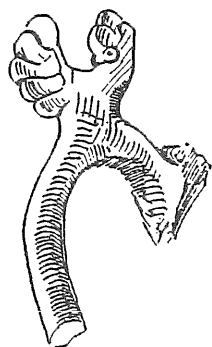
63a 図51



64 図52



65 図53



67 図55



73 図59



66 図54



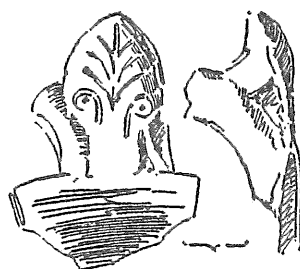
69 図56



75 図61



71 図57

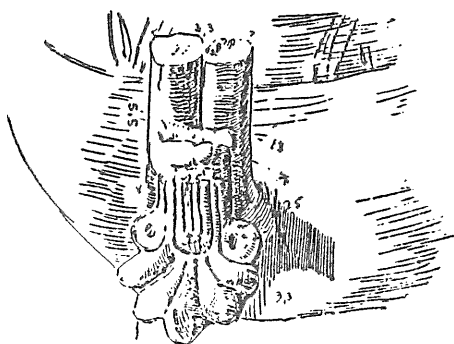


72 図58

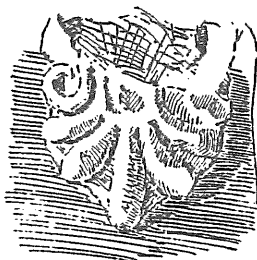


74 図60

Figure 6 貼付文装飾のある無釉陶器、把手の飾り突起



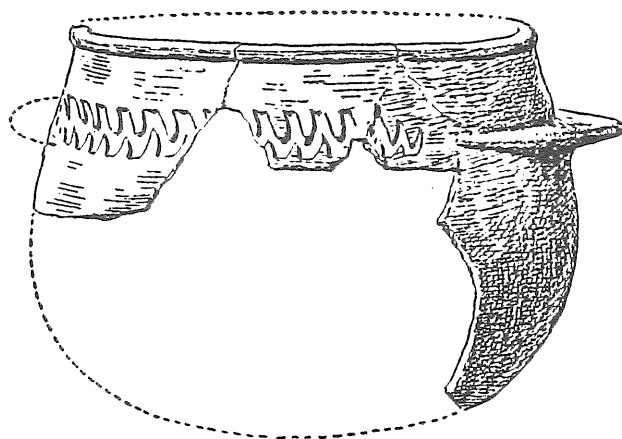
79 図62



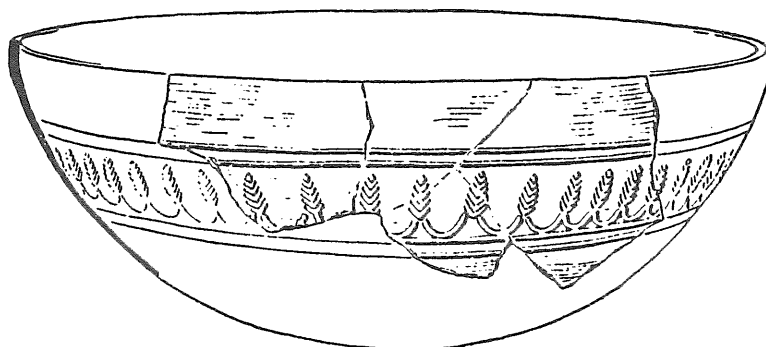
80 図63



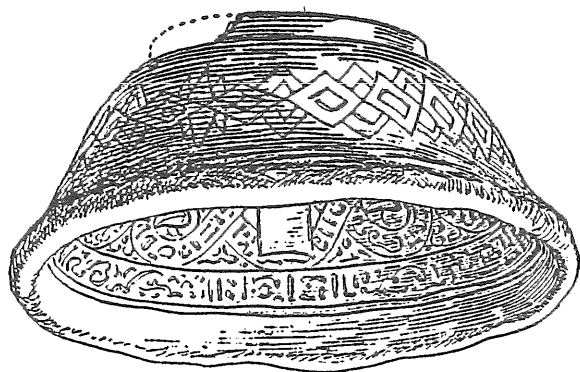
81 図64



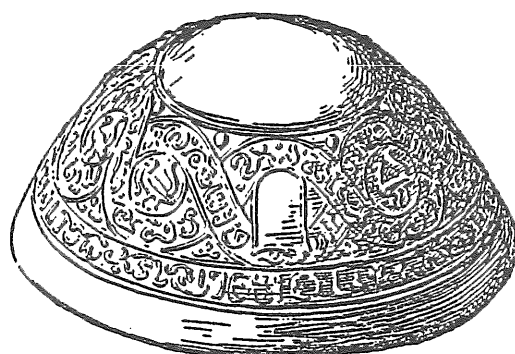
82 図65



83 図66



IA Berlin 図67a



IA Berlin 図67b

Figure 7 貼付文、刻線文、型文装飾の無釉陶器と型鉢